魔砲少女の世界でデバイスショップ

只野飯陣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔砲少女の世界でデバイスショップ

【Ｎコード】
Ｎ１９８２ＢＡ

【作者名】
只野飯陣

【あらすじ】
無量大数の転生者、百貫える筈の能力を５つしか受けとれず、しかも戦闘に役に立たない才能が大半、そんな彼女がマジカルでリリカルな世界で転生者を釣りながら生きていく話し

ルーレットとか苦手何だ（前書き）

書き始めてしまった
ストーリー上クロスも歓迎
寧ろクロスしたくて書き始めた
三次創作も歓迎、むしろ狙ってた

一気に三話書いたが、分けた意味あったのかな

ルーレットとか苦手何だ

暗い……とてもとても暗い空間で俺は目覚めた。
辺りには光も無く、立っている感覚もしない、そんな空間に……突如として鳴り響くドラムロールの音色。

デュララララララデュラン！…しゃん

最後の最後でバチがドラムの端に当たった間抜けな音を響かせるという、思わずずっこけたくなるような演出の直後に俺の居る空間がライトアップされ光に包まれた。

「おーめーでーとー」

「貴方は今回神のミス死亡事故無量大数突破記念の特別転生に選ばれましたー！」

「とーくーてーんー」

「ルーレットを回しますからダーツを投げてくださーい！そりゃ！」

カララララ！

対照的な二人のバニー美女が交互に喋りながら俺に百本のダーツを渡してくる。
はっきり言ってまったく理解出来ていないが、流されスキルＥＸは伊達ではない、ポカンとしながら全てのダーツを投げていた。

「ｏｈ……まさか百本渡して命中が五本だけとは」

「ノーコンー」

ほっとけ。

「しかも微妙なのばかり、家事の才能に音楽の才能、工学の天才に物真似の才能、唯一まともなのが召喚能力だけとか」

「きみーおわたー」

いや、説明してくださいよ。

「まぁこんな運が無いのも珍しい、こうなったらとことん悲運を極めてきてくださいね！」

「いてらー」

は？

一気に視界が下がり一瞬で二人の姿が消えた。

あぁ、落とし穴か、成る程把握、取敢えず最後に突っ込ませてくれ。

「無量大数ってどんだけミスしてんですか」

テンパって突っ込みどころ満載なのに突っ込みどころ間違う自分が嫌だ。

異性で同性な同居人

俺は今、同居人の料理に舌を満足させながら愚痴を聞いている。
もはや二時間になるだろうか、赤ん坊の頃から意識があり、更には前世の記憶があると言う彼女は家事が上手く歌も聞き惚れる、所謂万能型な人間だ。
召喚術も扱えデバイスも自作出来るという何とも恵まれた女なのだが、如何せんストレスを貯めやすく流されやすい。
気が多いと言えば良いのか、家を出れば頼まれる事全てにイエスと答える。
そのせいで今や俺達のコンビは部隊内で便利屋扱いされている。やれやれだ。

「聞いてるのかハクタク！」

目の前で延々と愚痴を溢す女が机を叩いた。
右手に握られた一升瓶がチャプンと音を鳴らし、

「聴いてる、聴いてるから落ち着け」

適当に流しながら料理に視線を戻す。
やはり美味い、今日も１０８部隊は激務が待ってるんだろうな、鬱だ。

サイド転生者

俺の愚痴を無視して黙々料理を食べ始める同居人を睨み付ける。

完璧に聞いてないだろ、これは。
暫く睨み付け続けたが此方を向く気配は無い。
俺は小さくため息を吐き出し外を眺めた。
俺は所謂転生者だ。
謎バニーに百本ダーツを投げさせられ五つの才能や能力を貰い、この世界に産まれ落ちた。
赤ちゃんの頃は意味も解らなくって良く泣いたな。ある程度身体の自由が聞くようになって、自分が女だと気付いた時にも泣いた。月のあれが来た時は大分女の生活に慣れてしまってはいたが、それでも絶望した。
それは最近の記憶だな、辛かったんだよ、妊娠とか多分死ぬよ、女って凄いな。
まぁそれでも女の肉体に男の精神は何かと不便だ。
性同一性障害みたいなもんか？と思われるがあれは思考だけでは無くフォルモンバランスや何やらで拒否してしまう程になるらしい。
生憎と完全に、フォルモンバランスや何やら肉体は完璧な女だった俺は恥ずかしいとは思っても拒絶はしなかった。
単なる女装であり、ファッションだと割り切れたからかもな。
まぁ今では男の時より色々なジャンルの服に手が出せるからそれなりに楽しませて貰ってる。
お陰様で女として違和感が無くなったがな、畜生。
流されやすいからって肉体に精神が流されるって、俺は単純なのかもしれない。

「時間だ」

不意に、同居人であるハクタク・ウワラルクが席をたった。
俺は思考の海に沈んでいた意識をハッと引き上げ、彼の顔を見た。

「じゃあな、行ってくる、お前も無理はしないようにな」

そう言ってボフンと俺の頭に巨大な手を乗せる同居人を睨み付けながら、小さくため息を吐き出した。

「良いから行けよ、今日もどうせ激務だろ、遅刻すんぞ」

軽く手を振りハクタクを追い出すようにシッシッと言う。
それに苦笑を漏らしながら、ハクタクはその場を後にした。

「っ～……さて、俺も働きますかね」

腕を伸ばし背の骨を鳴らしながら立ち上がる。
生活スペースからデバイスショップに続く扉の前で、軽く髪を結い上げ赤いエプロンをつける。
今日も平和に平穏な毎日を生きますかね。

☆★☆★☆★☆★☆

「らっしゃーせー」

新聞を広げ最近の事件を流し読みしながら、店の扉が開くのに合わせて定型文を口ずさむ。
客は思い思いに市販のデバイスやデバイスパーツを探し店内を歩く。
中にはカウンター隣の駄菓子を凝視する青髪もいたが、一緒に居た茶髪の女の子に耳を引っ張られデバイスパーツのコーナーに歩いていった。
俺は欠伸を噛み殺しながら新聞を捲る。
最近は物騒な事件も少なくて新聞も話題性に欠ける。
まぁ平和は良い事だから文句は無いのだが、どうも退屈だ。

軽く首を鳴らし、新聞をバサリと机の上に投げ棄てる。
と、丁度そのタイミングでさっきの二人組みが歩いてきた。
青髪の手には二世代くらい前の安いローラーが、茶髪は小型のアンカーワイヤーと巻き取りモーター、それに俺の自作の回路を数種持っていた。

「こんな旧いローラーで良いのか？それに回路も、高いよ？」

何となく気になり聞いてみた。
士官学校の生徒なのか身体のあちこちに傷が見えるし、何より服装に遊びが少ない。
多分お洒落に使うお金をデバイスパーツに注ぎ込んだのだろう。
高いからな、デバイス。
「あっ……お金が足りなくて」

「このお店の回路は質が良いですし、妥当な出費ですよ」

タハハと笑い後頭部をかきながら答える青髪とは対称的に、茶髪はしっかり計画的に決めていたらしい。何とも凸凹な二人だ。

「ふぅん……嬉しい事言ってくれるな、よっしゃサービスだ。こいつもやるよ」

やはり自分の開発したパーツを褒められるのは嬉しいからな、俺は立ち上がり試作の魔力刃整形機巧を取り出し茶髪の女の子に渡してやった。

「そ、そんなっ悪いです！」

慌てて手をふる茶髪を無視して、精算をすませた商品と同じ袋にぶ

ちこむ。

「ほら、遠慮すんなガキんちょが」

ニヤリと笑みを浮かべながら袋を差し出す。それで諦めたのか申し訳なさそうにしながら袋を受け取ってくれた。

「いーなーティアー」

と茶髪を羨むように見詰める青髪に苦笑を漏らしながら、ティアと呼ばれた茶髪が何かに気付いたように辺りを見回した。

「そう言えば、今日は旦那さんはいないんですね？」

「あぁ、あいつは局員だからな、仕事だよ、因みに夫婦じゃねぇから、同居人」

俺はその質問には慣れたもので軽く流しながら否定する。
アイツと同居するようになってからこの手の質問は後を立たないからな、慣れたもんだ。

「ふぅん……あっ、スイマセン長々と」

と、ペコリと頭を下げながら店を去る二人に軽く手を振りながら椅子に座り直した。
今日もデバイスショップ【トリッパー】は事も無し……ってな。

過去のあれこれ

俺は捨て子だった。
赤ん坊の頃から自我を持っていた俺は、若い頃は良く親を探してさ迷っていた。
名前も解ってたし、何とかなると思っていた。
施設を飛び出し夜遅くまで住民データと睨めっ子をするようになったのは五歳の頃から。
ネットカフェに籠り管理局にハッキングを仕掛け個人の情報を洗いざらい探した。
それで解った事は、俺を産んだ赤の他人はミッドチルダにはいないという、何とも絶望的な事実だった。
結局、俺は母親という他人探しを諦めその後の４年を歌を歌ったりレストランでバイトしたりして過ごす事になった。
この世界が子供でも働ける世界で助かった。施設は何だか息苦しかったし。
さて、そんな毎日をのらりくらりと過ごしてる内に五年の月日が経ち、俺はとある男と出会う事になる。
良くある転生者にとっての登竜門、他の転生者との会合だ。
最初は御互いに警戒しながら正体がバレないようにしていたというのだから笑える話だ。
どっちもバレバレやっちゅうの。
アイツとの出会いはバイト先のレストランで傷害強盗事件が起きた事が原因だ。
その時俺は間抜けにも厨房で鍋を振るのに必死で気付いていなかった。
全ての料理を片付け手拭いで汗を拭っていたら辺りが騒がしいのに気付いた。
何だ何だと野次馬根性全開でホールを覗いて目に入ったのは、何処

かで見たような夫婦剣を手に倒れ付した男と、顔を真っ赤にしながら男を睨み付ける女、更には壁にめり込む人相の悪い男。
まったく状況が解らないし、後で聞いても誰も呆れたような苦い顔をするばかりで答えてくれなかったから、未だ不明だ。
ただその夫婦剣を見た瞬間に男の正体に気付いた俺は慌てて隠れた。
それを目敏く見ていた男も俺に不信感を持ったのか色々と調べたらしい。
そこで御互いに転生者と認識し、警戒しあう毎日が始まった。馬鹿か俺達は。
暫くして、御互いに危険は無いと判断してからは和解し、更に奴からここがアニメの世界であるとも教えられた。
正直たいした興味も無かったが、男が原作で不幸になる人を救いたいから地球に行くと言った時は驚いた。
いや、男が地球に行くというのにではなく、地球が有ると言うことに。
探さなかったのかって？
多元世界がどんだけあると思ってんだよ、探す気何ざ母親がミッドチルダにいないと解って諦めたって時点で解るだろ？つまりはそんな気はおき無かった。
まぁかなり最初の二桁台の世界にあるらしいから探したらかなり速い段階で見付かったんだろうけどな。
それでも探す気はしなかっただろうな。今更地球とか言われても。
とにかく、そこで初めてこの世界がアニメの世界だと解った俺は、とある壮大な目的を持つようになったんだ。
そう、自分の店を持つという。
料理店か音楽スタジオか、それとも機械弄りか悩んだんだけどな。
料理何て毎日作れるし音楽とかはネット投稿や個人でジャケ売出来るだろ。
だからデバイスショップを始めようと決意した。
それに原作とやらを知ってる転生者を探しといてくれって、奴にも

頼まれたし。
だから俺の店、かなり突っ込み所が満載何だよな。
まぁそのお陰で「ハーレムうっひょい」とか「俺最強ｗｗｗ」とか抜かす馬鹿を大量に釣れたんだが。
うはは、ざまぁ。
誰がお前らみたいな糞童貞に股を開くか、死ね、いやマジで。
視線がキモいんだよバハムート三兄弟呼ばれてえのか、サーヴァント召喚されてぇのか、脂ぎった目で見てきやがって、サモナイト石無しでも出せんだぜ？
……すまん、取り乱した。
いや、兎に角それ以来俺は自分の店を持つ為に金を貯めて本を買って転生者仲間のコネでカリム？とかレジアス？とかいう人の後ろ楯を得て店を開いた。
従業員の採用条件は転生者、もしくはトリップしてきた者とする。
とか普通に広告に書いたりして、奴との約束も守った。
そのお陰で馬鹿を大量に釣れたし、気の良い転生者とも何人かと知り合えた。
それに毎日が充実してる。
この生活は捨てられなかったら無かったかもな、そう言う意味では、母親である他人なアイツにも感謝だな。

因みに、奴は悉く原作介入に失敗し続けて来たらしい。
不憫な奴だ。

日常1

「知らない天井だ」

「寝惚けるな」

ベコンとハクタクに頭を叩かれた。
音がヤバイよ、俺頭を抱えて悶絶してるし。
というか良く見たらハクタクが珍しくスーツを着ている。
コイツは真面目で確り者に見えて実はかなりだらしなく面倒くさがりだ。
朝ネクタイがズレてるなんてしょっちゅうだし、ワイシャツの後ろがはみ出してるなんて毎日だ。
猫舌で一口味噌汁を飲んで、熱さに驚き溢すなんて事もあるし、休日は自宅でだらけてる。
基本、俺がいなきゃ駄目な奴なんだ。
そんなコイツがパリッとスーツを着こなす。ネクタイも問題なくワイシャツも入れてる。しかもよれてない。
胸ポケットにはちゃんと携帯灰皿を入れてるしハンカチにティッシュも持ってる。
ボサボサの髪もポマードで固めてる。
……何だか腹立たしいな。

「一人でそんだけ出来んなら毎日やれ」

そう言って腰をパンッと叩くが、畜生まったく動じねぇ。
やっぱり男と女の差なのだろうか。

「それはすまないが、一々チェックを入れなくても良いだろう」

と顔をしかめながら反論してくるが、甘いなハクタク、お前は自分がどれほどだらしない人間か解っていない。
お前のだらしなさは上げて行けば枚挙に暇が無いほどだぞ。

「で、何でスーツ何だよ」

「む……士官学校の卒業式がでな」

あぁ、だいたいそれで解った。
どうせ良い奴は海に引き抜かれたから余り物の中の福を探しに行くとかだろ、陸は辛いねぇ。

「そうかい、まぁがんばんな、ハクタク陸曹殿」

と言いながらポンとハクタクの肩を叩く。
縞パンタンクトップとまぁそれなりの格好だが今更過ぎてどちらも慌てない。
ハクタク何か叩かれた肩に手をやり深く溜め息を吐いている。そんなに勧誘が嫌なのか。まぁ得意では無いだろうが。

「仕事だろ、諦めろ」

そう言って壁に掛けられていたツナギ……オーバーホールを着込む。
今日は頼まれていたメンテを全て片付けたいから店には顔を出せない。
だから店は真美ちゃんに任せる事になる。
因みに真美ちゃんは転生者だ。例の求人広告に釣られて来たらしい。
しかもその目的が保護だと言うのだから笑えない。
管理局の闇を調べてる最中に「俺のハーレムに入れてやるよ」とか

ほざいたクソ気持ち悪ぃ変態転生者に邪魔され、管理局に追われる身となっただとか。
取敢えずその糞転生者はカスみたいな奴らしいから、屑に変えてやった。
男の転生者ってどいつもこいつも最低過ぎる。絶滅しろよって本当に……
悪い。熱くなった。
まぁ兎に角、そんな経緯があって真美ちゃんはウチの店で働く事になったのだ。

「んじゃ、気を付けて行ってこい」

「あっ……」

それだけ言い残し俺は工房に姿を消した。
ハクタイの呟きとか聞こえなかった。

「俺の飯……」

聞こえなかったんだよ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1982ba/

魔砲少女の世界でデバイスショップ

2012年1月5日01時47分発行